

演題 「道の駅ましこ」を支える女性の活躍！

講師 (株)ましこカンパニー交流広報リーダー
山崎祥子さん



プロフィール

益子生れ、益子育ち。有機農業の専業農家に生まれ、農産物の流通や地域づくりを宇都宮大学農学部 農業経済学部科にて学ぶ。卒業論文は明治に濱田庄司（陶芸家・人間国宝）が益子にきて以後、平成までのコミュニティを調査。地域をコーディネートする役割の重要性に気づき、益子町役場に入庁。3年目で、道の駅準備担当となり4年従事。平成29年3月に退職し、現在は(株)ましこカンパニー交流広報リーダー

△▽はじめに▽△

講師：こんにちは、道の駅ましこにお越しいただきありがとうございます。本日は、道の駅ましこの立ち上げの経緯などを私自身の事を交えてお話させていただきます。最初に私がどうしてこのプロジェクトに関わるようになったのかお話させていただきます

私は益子生れ、益子育ちです。農家に生まれ、子供の頃から農薬を使わない農業に励む両親の頑張りを見て育ちました。しかし、手間暇がかかる割に見入りの少ない無農薬の農業は周りの農家から理解されていませんでした。小学校4年生か5年生の時、学校の授業で、日本が減反政策をとっていることを学びましたが、両親の頑張りが報われない日本の農業の在り方に疑問を持ち、家に帰って父に質問しました。「お父さん、なんで国はお米を作るなというんですか、こんなに頑張っって美味しいお米をお父さんは作っているのに、それが安くしか売れないのは何が問題なんですか」と。父は農家でありながら、社会、芸術、地域の事もなんでもちゃんと答えてくれる人でしたが、この時は黙って背を向けていました。色々知っている父ですら答えられない。個人としても、地域としても、問題解決に取り組んでいても、どうしても超えられない何かがあると、大人になってから知りました。そのことが非常に印象に残っておりまして、進路を考えると

き影響を受けました。地元真岡女子高では部活で陸上の競歩に励んでいたため、将来は体育の先生になろうか、それとも農業に関わることをしようか考えていました。進路決定においては、先生の後押しを受け、宇都宮大学農学部農業経済学科に入学し、農産物の流通や地域づくりを学びました。そこでは、グローバル化が進む現代において、地元で学んだことを地元で生かしていける人材がこれから必要となる。更に、地域で必要とされる人物は、地域の事をより深く知っている人材でなければならないと教えを受け、卒業論文では益子町について調べました。卒業論文を書くにあたり、祭りに関わって、地域の人や行政職員といった大人と知り合い、それまでとは違った視点でまちづくりを見ることができました。その時に感じたのは、それぞれのコミュニティが独立した動きをしていて互いに距離があるなあという事。それぞれのコミュニティの頑張りがつながりあって相乗効果のある街づくり、パワーが結集していくような仕事が出来ればと思い、益子町役場に入庁しました。面接のときにどこに行きたいか聞かれて、農政と観光に興味があると答えました。通常そういった人事は叶わないとされていますが、何故か願いが叶い、産業観光課に行くことが出来ました。

その年は平成23年、東日本大震災の直後で職員はみな震災対応で忙しく、新卒の面倒をみている場合じゃありませんでした。私は益子町内にある焼物に関する支援をさせていただきましたが、益子町内にある登り窯50基がすべて潰れてしまい、窯を作る職人もいない、資金もない、リーマンショックの後でもあり廃業する方もいらっしゃいました。その中でも窯のサイズを小さくして復興したいというような気持ちを持っている方もいらっしゃったので、そういう方の支援として、融資や基金を扱う仕事をしていました。2年目は観光の方に配置変えられて、グリーンツーリズムを町に適応していく所でした。地域の方で団体を作って、プログラムを作り、実際にお客様にきてもらって体験をしていただくというのを年間通じてやっておりました。そして3年目になり、農政課「道の駅」担当に配属されました。



道の駅ましこがこういった経緯でできたかという事ですが、平成10年にさかのぼります。総合振興計画というものを町で定めなければならないという事で、国からの指示のもと計画づくりが進んでいく中で、ここ田野地区は18歳から60歳の生産人口中の農業従事者が非常に多い地域で、後継者についても他に比べると多い地域になります。また、農家のおかあさま方も農業の仕事をされながら加工の免許を取って、小さい加工所を作って直売所で販売をする事を非常に長く続けておられた地域でありました。なので、農業の拠点がこの地域には必要だ、加工や直売に関する拠点になる所を町で整備し

てくれないかという声を計画に入れました。しかし、計画はできたんですが、財政は非常に厳しく箱物行政はできないという頃だったため、平成10年から平成21年まで計画が全く動かないという、町の財政としては非常に厳しいときを過ごすことになりました。

平成21年に、現町長で道の駅の社長でもあります大塚町長が町のトップになり、今までもっていた計画の中で町として重要なことであって、実行しなければならないことなど事業の精査を行います。その方向性を探る中で一つ、道の駅という可能性が出てまいりました。そのころから道の駅の検討委員会といったものが準備されてくることになります。私が担当になったのは平成25年です。用地はこの場所と決まっております



ますが、用地交渉も未だされておらず、でも建築の話は進めなければいけない。私はソフトの担当でしたが、県庁通いをしまして、色々言われては無言で上司と車で宇都宮から帰ってくるという日々を過ごしておりました。

ただ、いろんな道の駅の事例を伺う中で、建物はできたけれど、中の組織体が、施設オープンと同時に整ってないという状況が非常に多く見受けられたので、道の駅ましこはそういったことが無いように、平成26年にましこのマルシェという直売所だけ先にオープンします。その理由としてはまず、農家さんとスタッフが顔見知りになること。そして、道の駅で使う機器類やレジや厨房などの設備について、現場で動く人ができるだけ意見を言って、オープンしたときに、「こんなはずじゃなかった」というのを少なくしようという事でした。毎日喧嘩に近いような話をして、それを解決するためにはどうしたらいいのかと農家さんともだいぶお話をさせていただきましたし、道の駅オープンになるまでに規約は3回改訂をしました。本当に、道の駅オープンに向けてみんな何ができるかというのを考え、農家さんにも非常にお知恵をいただきましたし、その中で信頼関係というものができまして、道の駅オープンの時には仕組み作りの方はほぼ出来上がっていたんじゃないかなと思います。

こちらは住民説明会などで使わせていただいた資料になります。レストランでは地元のお野菜を使ったメニューと果物のジュースが飲みたいなあとか、道の駅の入り口には作家さんの作品がたくさん並んでいたら、益子の街中にも足を運んでいただけないかとか、他にも街中から非常に離れていたのでは2次交通の整備も必要であろうし、後は商品として生産者さんからお預りするものだけではなく、地元の良いものを使った加工品を道の駅自ら作っていくことも非常に大切だと思っていましたので、加工プロジェクトなんていうのも書かせていただいております。ただ、住民説明会の時にはまだ建物

もございませんし、実態の見えない、絵にかいた餅なので「こりゃほんとにできるんかお姉ちゃん」って言われることもありました。でも何とかこれを実現していきたいのでみなさん一緒に力を尽くしていただけませんかと、様々な機会にお話しをさせていただき、私以外にもメンバーや上司もおりまして、町長自らオープン前には出荷を希望している農家さんすべてのお宅にお願いにあがったという事があります。

道の駅は、運営会社だけでは成り立たないんですね。農家さん150人業者さんは150人合計300人の方、プラスご家族の方も含めて相当の人数の方が関わられて売場が埋まっているという事。また、道の駅でイベントをするにあたっては地域の方々にも出店やご協力をいただいて、道の駅は地域そのものと私は思っています。そういった地域とのつながりを大切に、また地域のいいものをご紹介できる売場を実現するために、平成27年11月に第三セクターを設立しました。このとき、優秀な販売にたけた百貨店さんをお願いすると地域を表すような売場は実現できないと考えまして、レストランも売場も事務職業も全て一つの会社で運営をする第三セクターでないといけないという結論に達しました。町の方で5千万、地域金融機関の方からそれぞれ二百万円ずつ出資金をいただいて、第三セクターを作ることになりました。なので、忙しい時には私もレジに入りますし、洗い場にも参ります。これが、他のテナントさん同士だと、雇われている会社が違いますので、あっちが忙しくても私が手伝いに行く事は基本的にできないんですね。

見ていただくとわかるのですが、ここは周りには田んぼ、大きい交差点、歩道の信号も一か所しかございません、そのくらいのどかな場所にあります。オープン前は本当に採算がとれるのか、赤字じゃないかとかいろいろありました。なので、オープン当初は最小限の人数で補いあいながら運営ができるという想定で、初めの目標は年間3億円3年間でお客様が30万人来てくれたらいいなという計画だったのですが、実際のところ、2年目からが1年間通しての売り上げですが5億1千万円で、3年目は6億2千万円という事で、売り上げの方は今のところ順調です。またお客様も大体年間70万人くらいおみえになっているという状況になっております。なので、大学で学んだことを社会に出て自分の仕事としていることを、今のところ一応すべて繋がっている状況の中で日々を過ごすことができ私は非常に幸せであります。町として投資をした額としては、この施設は建物土地含めて14億円です、国の予算とか鹿沼市さんの予算の規模でいうと少ないかもしれませんが、益子町としては非常に大きい投資をしたと思っております。私個人としては新築ではなくて、既存にある建物をリノベーションしたほうがいいのではないかという思いもありましたが、それはやはり仕事ですので叶いませんでしたね。この素晴らしい景観の中で、地域の物をお売りできるのは非常に幸せなことだと思っております。ただ、きっと近い未来経営上厳しい局面が見えてくると思います。その時には新しい事もチャレンジしていかなければならないと思っております、地元の野

菜を下処理した形でレストランにお届けする仕組みを備えた加工所を作ろうと考えております。あとは地域でジュースを作っていた工場がありまして、そちらの工場が人員的に運営が難しくなったので、道の駅で運営を引き継ぐ形でジュース製造の免許を取得することになりました。あとは、ホテルですね、旧南間ホテルみなさんご存じでいらっしゃいますかね。上皇陛下が日光で玉音放送を聞かれた施設が奥日光にあったのですが、そちらが益子町に移設になりまして、そちらをリノベーションしてホテル業に就くという話も道の駅ましこで行うという事になりましたので、時代に応じて地域から求められる仕事については、積極的にチャレンジをしていきたいと思っております。そして、20年30年たった時に「道の駅を作ってみなそれぞれ頑張ったので今の自分たちの暮らしや地域があるんだね」って振り返れる瞬間が来たら、それが公共の仕事としては一番望ましいことだと思うので、その瞬間を私は見たいと思って仕事をしております。

わたくしの事と道の駅の事をお話させていただいたんですけど、説明については以上になります。何かご質問などございますか？

受講生：これから、やりたいことは？

講師：そうですね、山羊が飼いたいですね。あの敷地の端に小屋を立てて、山羊を飼うっていうのが、道の駅を作る前からの夢だったんですが、検疫ですね。生き物の関係があるのでなかなか実現はしないのですが。ここから向こうの端に山羊が動いている姿が見えれば歩いていきたくなるかなと。

あとは、みなさん作ってらっしゃる農産物を菓子に加工する。和菓子だとかそういったこと。あと、観光の町ではあるのですが、モノを売る以外の観光というものがまだまだ益子町は育っておりませんので、道の駅でツアーを組んでそれを案内する人材が益子町にたくさんいるという状況を10年20年かけて担っていきたいです。



行程表

8:30 8:40——10:00——11:00——12:40——13:00——14:00——15:30
集合 出発 道の駅ましこ（昼食） 出発 見学（つかもと・悠和館） 出発 到着

<<アンケートより>>

- ・山崎さんのお話に大いに感動しました。熱意があって、まっすぐで未来が明るいと思いました。
- ・益子は何度も来ていますが、今回初めての所で良かった。食事も美味しかったです。
- ・ましこ悠和館（旧南間ホテル）良かったです。